

## 専門職の権化―ドロシー・デッソー教授

—それはわれらのインスピレーション—

嶋田啓一郎

風に向って額をあげて、まっしぐらに走ってゆく女人がある。髪も裾も風にはためき、草原を踏む白い素足はかもしかのように軽やかである。一日の旅を終えて地平線に近付こうとする真紅の太陽をひたすらに追い求めて、一途に凝視するまなこには、うしろから迫る宵闇も、嵐を告げる雲の動きも、憂いを誘わない。ドロシー・デッソー教授の生活振りには、いつもそのような一徹果敢にして、騎虎の勢くだることを得ぬ執念ともいべきものを感じさせる風格がある。それは、ケースワーク真髓をひたすらに追い求めて、そこに専門職の大道を拓こうとする精進一路の人生の姿である。いま定年を迎え、同志社大学の教壇を離れてゆくデッソー教授のうしろ姿には、孤影悄然、老人の落莫の境地に消えてゆく面影などは聊かもみられない。彼女は若者のごとく未来と取り組み、加茂川のほとりに、その熱意を籠めて築いてきた葵橋クリニックで、ケースワーク活動に専念し、そこでまた、後に続く若い人々の訓練に、精根を傾ける朝夕を迎えられようとしている。ケースワークこそは、彼女の生涯を照らす真紅の太陽である。

私は己が人生行路において、斯くも自己の初心に四六時の生活を捧げ尽す人物を多く知らない。世阿弥は花伝書に、「初心忘るべからず。その時々初心忘るべからず。老後の初心忘るべからず」と記しているが、初心をただ軽々と語

### 専門職の権化—ドロシー・デッソー教授

る人に、その時々々の初心を忘れぬことは容易ではなく、ましてや老後の初心を忘れぬことは、いかに困難であることか。彼女は、その永い人生を、結婚するいとまもなく、ケースワークに専念し、否、ケースワークそのものと結婚することによって、全心全霊を傾倒して、いまま余念なくそれに純愛を注ぎうとしていた。私は、このようなケースワーク専門職の権化ともいべき人物を、同志社大学に迎え、若者たちに専門職氣質の真髓ともいべきものを伝えて頂く機会を持ち得たことを、少なからぬ誇りとし、限りない感謝を表したいと切に願う。

デッソー教授は、米国における社会福祉学界の名門、ニューヨーク・スクール・オブ・ソーシャルワーク大学院の出身。デンマーク系の父、英国系の母のもとで生い立ち、紐育の人間疎外を余儀なくする悪しき社会環境から、人々を解放したいという一念をもって、廿二歳のとき、先ずボランティア活動に参加し、翌年から、紐育のコミュニティ活動に有給職員として働き、以来四十八年の久しきにわたって、ケースワークに従事してこられたのである。現業の厳しさは、専門職教育の必要を自覚せしめ、卅五歳のとき大学院専門職コースに再入学、これを修了された。米国におけるケースワーク屈指の指導者ゴルドン・ハミルトン教授の薫陶は、いわば筋金入りのケースワーカーを育てあげたのである。戦後、米軍の日本における社会事業政策に従事するため日本を訪れ、爾来今日まで廿四年の永きにわたって日本に滞在せられ、国際社会福祉会議にも日本代表として出席され、その住居も純日本風の新築という擬りようである。私たちは、彼女の異常な熱意による仕事振りに感服し、十八年前、未だケースワーク教育では播藍期にある日本の実状を考え、いわば「本場育ち」の教育方法を期待して、同志社大学に迎えることにしたのである。

デッソー教授が専門職教育を受けられた時期は、精神医学の隆盛に向いつつある頃であるから、コミュニティ活動の職場環境を体験してこられたとしても、その力点はおのずから精神医学的関心に傾斜せざるを得ない。戦後荒廃のなから立ち上った日本社会が、資本蓄積優先政策をもって、経済成長一点張りの国策をすすめる、そこに醸しだされる国民の所得格差、大衆の経済的窮境に対して、学界はおのづから、体制批判や貧困対策に緊急の課題を見出さざるを得ない

状況におかれているのであるから、デッソー理論のサイキアトリック・ケースワーク的傾向を帯びる講義は、学生の社会的感覚と必らずしも合致しない側面をもつことは、当然予想されることであつた。まして米国のオーソドックス・クリスチャンの伝統的な几帳面さと厳格さを身に負う猛烈なドリル振りであるから、学生・院生のなかには強い抵抗を示す事件が起つてきたとしても、不思議はない。しかし卒業して現場の実践活動の厳しさのなかに身を置いた諸君の多くは、デッソー教授の厳格なドリルの賜物が、現場活動には何よりも役立つと、懐しげに感慨を語るのが常である。

私たちは、デッソー教授には、米國ソシアル・ケースワークの真髓をなまのまま講義され、その持ち前の合理主義と厳格主義のドリル振りを發揮されることを期待した。日本の環境への適応を顧慮して、中途半端な日本社会への迎合をもって、霧のなかを見透すような不徹底な妥協的講義をされるよりは、米國の社会事業感覚をそのままに伝えて貰う方が、質の高い講義となると考えたからである。それは、多感な若者たちに國際的感覚を養う機会ともなるであろう。日本の封建的社会關係を残存せしめる生活環境は、米國とは著しく違う。それを研究しているのは、日本人としての私たち教師であつて、学問的に米國の理論の受け入れ方法を理解させ、日本の特殊事情を客観的、体系的に自覚せしめること、あるいは米國理論の國際的偏向性があれば、それを批判することは、実に私たちの責任である。同志社教育は、外人講義を日本的に消化し得る伝統を養つてきたのであるから、その異質性はそれほど恐るべきことではないと考えた。それよりも、私どもの最も期待したことは、日本の社会福祉教育の今後の重要課題たる「スーパービジョン」の何たるかを教授されることであつた。その道にかけては、デッソー的教授法ほど、その真髓をよく伝え得るものは、いままでの日本ではまことに稀有のことであつたと思う。デッソー教授は、その住居を開放して、現場のケースワーカーたちと学生・院生との共同研究の場を提供し、文字通りその全生活を教育に捧げて悔いない熱心さであつた。退職に先立つて公刊された『ケースワーク・スーパービジョン』の一書こそは、デッソー教室のまことの面目を躍如たらしめて、余ますところのない愉快な書物である。

専門職の権化 ドロシー・デッソー教授

デッソー教授の定年退職を記念するに当って、忘れることのできないのは、永年その通訳を主として担当された上野久子姉の非凡な協力である。上野姉は、同志社大学長を勤められた御主人への内助のかたわら、デッソー教授と活動を共にせられ、教授の言わんとするところを先立って感得・理解するほどの、一身同体の境地をもって、学生・院生の指導に貢献せられた。その卓抜した通訳のゆえに、却ってデッソー教授の日本語学習は進捗しなかつたとさえ考えられるが、デッソー教授は良い同労者を得られたものと羨しく思うのである。

私たちの社会福祉研究は、戦後の開拓期に、このような献身的な人物に支えられて、国際的なスケールのもので、その間口と奥行とを拡大することができたのである。学園および現場にある同労の友と共に、私たちはその尊い生涯の精髓を捧げられたドロシー・デッソー教授の偉大な貢献と、その生活態度とを永遠に魂の奥底に刻んで忘れることがないであろう。その感謝の一念をもって、この記念号がうまれたのである。